

みんなの森 ぎふメディアコスモス

みんなの森 ぎふメディアコスモスは、「知の拠点」の役割を担い“フムフムエリア”と呼ばれる市立中央図書館、「絆の拠点」に位置づけられ“ワイワイエリア”と呼ばれる市民活動センター・多文化交流プラザ・スタジオ、「文化の拠点」となり“ドキドキエリア”と呼ばれるホール・ギャラリー等から構成される複合施設。知と絆と文化が偶然に思いがけなく出会う場として建てられた。この“偶然に思いがけなく出会う”ということは設計者である伊東豊雄氏が意図したことでもあり、また施設オープン後、多くの人に利用されていることがその証ともなっている。
(実施日時：2018 年 1 月 22 日 参加者数 11 名)

ているため、それぞれのチラシ等がとても見やすくなっている。これは、2 階の図書館の本棚にも通じる工夫である。「インフォウォール」前の空間には、「ワイワイ畳」が設置されている。これは、キャスター式の畳空間（36㎡）。W1.5m × D1.5m × H35 c mの畳が 16 個あり、組み合わせて使用したり、スタジオに移動させて利用することも可能である。見学会当日は、ロビーの中で腰かけとして利用されていた。エントランスホール右側には、円形の階段状の「ドキドキテラス」が設置されていて、様々な展示のほかセレモニーやミニイベント、市民活動の発表にも使われている。この「ドキドキテラス」の円形は、一部外部に飛び出っていて、屋外との一体的な利用もできるようになっている。エントランスホール右奥には、ホールやギャラリーが設置され、その左には「本の蔵」と名づけられ、外部から豊富な蔵書が見えるようになっている書庫が設置されている。

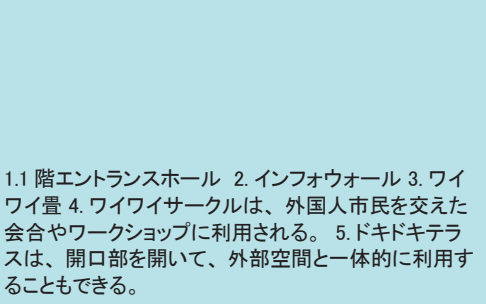
■施設の概要

□ 1 階

メインエントランスを入ると、比較的高い天井に木製の天井板が間を空けて水平に張られており、そのリズムカルなデザインに目を引かれる。

目を下に転じると、間仕切りの少ない大きな空間が広がっている。その空間の中、まずエントランス左側には、4 つのスタジオ（かんがえるスタジオ、つくるスタジオ、おどるスタジオ、つながるスタジオ）やこどものへや、協働のへや等、市民活動を支える部屋が建物の壁際に沿って設けられている。

エントランスホールから奥につながる空間には、「インフォウォール」が設置され、館内で開催されるイベント告知や市民活動団体を紹介するチラシ・ポスター等が掲示されている。この「インフォウォール」は全体的に大きく湾曲し



1.1 階エントランスホール 2. インフォウォール 3. ワイワイ畳 4. ワイワイサークルは、外国人市民を交えた会合やワークショップに利用される。 5. ドキドキテラスは、開口部を開いて、外部空間と一体的に利用することもできる。



6. 木造格子屋根とグローブ 7.2 階「フムフム」エリアの案内板。各グローブの模様は全て異なり、同じ模様を案内版でも使っているため、絵だけで場所を探すことができる。8. エスカレータの上部にもグローブが設けられている。

□ 2 階

エスカレータで2階に上がると、1 階とはまったく異なる視界が広がる。大きくうねる大屋根と、その下に照明のシェードのようなぼんやりと光りながらぶら下がる逆さまの漏斗状の大きな「グローブ」と呼ばれる装置。この「グローブ」は2階の大空間の中にいくつも設置されているが、これらが視界を遮ることなく一望できる。

この2階全体が市立中央図書館で、その「グローブ」ごとに対象となる年齢層や本の分類・分野が異なっている。案内板に表示されたマークと「グローブ」の模様とが一致しており、自分が行きたい場所も見つけやすくなっている。本棚は、この「グローブ」に沿うように、あるいは「グローブ」と「グローブ」の間を縫うように設置されており、必然的にどの本棚も曲線を持っている。そして本棚と本棚の間の通路を歩くと、その曲線によって、本の背表紙がとても見やすくなっていることに気づく。これもこの図書館の特徴の一つとなっている。

■建築の特徴

□建築コンセプト

大きな家と小さな家を組み合わせ
にぎわいのある「まち」のような建築をつくる

- ぎふメディアコスモスは、「大きな家と小さな家」というコンセプトから始まっている。それぞれに個性を持った親密な空間である「小さな家」が点在し、その周囲を、光や風を取り込み呼吸する柔らかなイメージ。

- また、計画地の広さを生かした低層で敷地いっぱいに広がった建物とし、全体に壁が少なく、極力一体感を生み出すような視覚的關係を内外につくり出している。
- そのことで各施設が個別に運営されていたとしても、常にどこかがにぎわっている「まち」のような建築が実現されている。

「グローブ」と「木製格子屋根」を組み合わせることで、
小さな家と大きな家を実現する

○小さな家：グローブ

- 「小さな家」として、2 階の図書館に設置されている、半透明で床から浮かんだ逆さまの漏斗状の傘を「グローブ」と呼んでいる。
- 上部に設けられた開閉式の水平窓を開けることで、機械による動力を用いることなく、またその形状自体が風の流れを生み出し、エネルギーを使わずに2階の大空間を換気できる。
- 上部トップライト（天窗）からの自然光をおだやかに室内に拡散させ、読書に適した光環境をつくり出す役割をはたす。
- 日没後には、「グローブ」内に設けられた照明のシェードにもなる。

○大きな家：木製格子屋根

- 岐阜の豊富な森林資源を活かし、構造面だけではなく意匠面、環境面などの分野でも十分な性能を併せ持つ木構造の屋根として実現されている。
- ゆるやかに波打つ形状を、120mm × 20mm という市場で流通しているような断面サイズの材料を使い、そのし



8. 自然換気のための水平窓 9. グローブ上部のトップライト 10. インターネットコーナー 11. 児童向けのエリアは、書架が大人向けよりも低く設えられている。12. せせらぎの並木 テニテオは、初夏には蛍を見ることができる。13. 並木テラス 14. 金華山テラスから金華山を望む。15. 金華山テラス

なりを利用しながら現場で積み重ねてつくり出している。（最も厚い部分で、3方向に7層(21枚)積層し、その他の部分は5層、3層と必要な耐力に応じて積層している。）

- 身近な小さい断面の材料を用いることで、地元の大工や製材所が参加することが可能となっている。またすべての材料を建産の東濃ヒノキ材としている。

□環境計画

自然エネルギーを最大限に活用し 消費エネルギー 1 / 2 の建築を実現する

- 様々な取り組みをバランスよく組み合わせることで、建物が消費する一次エネルギーを、1990年の同規模建物と比較して、約50%以上の削減を目指している。
- 「グローブ」と「木製格子屋根」が組み合わせられることで生まれる自然換気効果。
 - 「グローブ」の形状、素材が導く自然光拡散効果。(ポリ

エステル製の糸を3方向の軸で編み込んだ生地を中心とし、この生地を型にあてて熱成型したものに薄い布地を貼り、水平のロッド材を足し合わせることで形づくられている)

- 敷地を流れる長良川の伏流水を汲み上げ、その温度を十分に利用した熱源計画。
- 床輻射冷暖房による居住域空調。
- 日照時間に恵まれた敷地の特性を生かした太陽光発電(発電+採熱)。
- デシカント空調機を用いた湿度コントロール。
- 体感温度を指標とした快適性の評価とコンピュータによる最適制御

これらの取り組みは、省エネのために空間を細かく区切ったり閉じたりすることではなく、かつての日本にあったような、自然とのつながりを求める中で生まれる、快適で省エネルギーな環境をめざしたものとなっている。

金華山や長良川に呼応する文化の森をつくる

敷地の西端に整備された「せせらぎの並木 テニテオ」と建物南側の「みんなの広場 カオカオ」を中心に、この敷地を緑豊かな文化の森とするため、以下のようなさまざまな取組みがなされている。

- 岐阜駅ー長良川ー金華山をつなぐ緑の拠点をつくることで、街に緑のネットワークを広げる。
- 金華山の生い茂った深い森に対して、この地域の文化や環境にふさわしい樹種を選びながら、多様性のある明るい森をつくる。
- 240mの長さの並木道をつくることで、都市軸を強固なものとする。全体は6列の並木とし、中央の4列の樹種を「カツラ」とする。
- この場所が人々の生活の中心の一つとなるよう、柔軟な使い方ができる外部空間を用意することで、市民の多様な活動を支援する。

■ 環境共生住宅的技術要素

- I 省エネルギー : 「グローブ」上部の水平窓による自然換気、トップライトによる自然光利用、太陽光発電(発電+採熱)
- II 資源の高度有効利用 : 長良川の伏流水を活かした熱源計画
- III 地域適合・環境親和 : 緑の拠点及びネットワークの形成、せせらぎによる生物多様性空間の創出、長良川の伏流水の循環システム
- IV 健康快適・安全安心 : 床輻射冷暖房、デシカント空調機による湿度コントロール、体感温度を指標とした快適性評価とコンピュータによる最適制御

■ 基本データ

用途: 複合施設(中央図書館、市民活動交流センター、展示ギャラリー、ホール)

敷地面積: 14725.39㎡

竣工年: 2015年2月

構造・階数: 1階・中2階 鉄筋コンクリート造(一部鉄骨造)
2階 鉄骨造、木造(梁)

設計監理: 株式会社 伊東豊雄建築設計事務所

施工: 戸田・大日本・市川・雛屋 特定建設工事共同企業体

- 長良川の伏流水を利用したせせらぎをつくることで、様々な人々の活動や生物の多様性を生み出す。
- 建物の熱源として汲み上げられた伏流水が、せせらぎへと放流され、地中にしみ込み、樹木への給水となると同時に地中に帰っていく計画とする。
- 広場や並木道が建物と連携し、まちなかの避難場所として利用できる計画とする。

